
少年の詩

子鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の詩

【Nコード】

N4129C

【作者名】

子鉄

【あらすじ】

いつものように晴れた日、僕はいつもと同じように出かけた。でも、今日はいつもの今日ではなかった。

春が静かな足音と共に僕らの元へ訪れた。
やさしい陽の光が僕らと僕らの街を包む。

桃色のつぼみは一つ一つ花開き、私達はここよと歌っている。
そんな柔らかい歌に誘われて、僕は玄関の戸を開け外へ出た。

いつもと同じ朝、いつもと同じ街、いつもと同じお隣さんに元氣
良く挨拶をし、いつもと同じ服を着て出掛けた。

「いらっしやいませっ。何名様ですか？」

ここの喫茶店カフェドマルドではいつも優しいお姉さんが、明
い笑顔で迎えてくれる。

「あつ、はい。一名です。」

私は元氣よく返答する。

「いつもはマツつんやターちゃんなんかと一緒に来るのですが、今日
は二人とも河川敷に野球を見に行ってるというのがあっちゃったり
なんかしっちゃってですね。
はい。」

あと僕は野球はあまり詳しくないっていうのがありまして、まあそ
れならキー坊はやめとけよ、なんて言われちゃったりなんかしてま
した。」

「お、お一人……様ですね？」

「あつ、はい。友達はいます。それは本当です。」

「さつ、左様ですか。タバコは吸われますか？」

「あつ、いえつ、タバコは父ちゃんがいつも吸ってるんですけど、お爺ちゃんは吸わなかったというのが……」

(……スツと言えよ)

「禁煙席でよろしいですね？こちらへどうぞ。」注文が決まりになりましたらこちらのボタンをお押しくださいます。」

「あつはい、どーもどーも、i - d o m o」

いつものように明るい笑顔。

人は違っても、常に暖かい笑顔がここにはあるのです。

暖かい人と暖かい人が出会い触れ合う。
そんな掛け替えのない宝物がここにはあるのです。

うーん、昨日はクリームパへを食べたよ。

一昨日も食べたんだよね。あまり毎日同じ物ばかり頼んでると、バカの一つ覚えか何かと間違われるよね。うーん。
でも昨日と違う人だから大丈夫かね？
うんうんうんッ！

「すみませんっ！すみませーんっ！どなたかおられませんかっ？」

僕は立ち上がり、元気よく手を上げ、係のお嬢さんと呼んだ。

「はい。お決まりですか？」

（ボタン押せつちゅーたわな）

「あっはい。クリームパツフェを一つばかり頂こうと思ひまして。あと、お水をこぼしてしまつたので、おしぼりを五つ下さい。」

それでクリームは多めをお願いします。汁だくだね。えへへ。」

「はい、かしこまりました。」

（あ？汁だくだ？）

「クリーム忘れないでね？えへへ。汁だくだくだね？んだんだ。」

ウェイトレスの女性は足早に去つていった。

今日の早番は田中美代子さんじゃないのか。どうしたのかな？

野球でも見に行つてゐるのかな？

えっ！？

まさかマツつんと？

いやいや、やめてよやめてよ。ないよね。

うん、ないない。

田中美代子さんは、僕が初めてこの店にきた時に受け付けしてく

ださった方で、髪の毛の長いスタイルのよい、22〜3才の素敵なお方でした。

マツくんは僕に

「好きなんじゃないの？ええっ？」なんて事を言ったが、僕にも選ぶ権利があるよね。

うんうん。でもまあ、僕が本気になった時はどうなるか分かったもんじゃ無いけどね。

うん。

貯金は無いかとも万が一の時の為にカブト虫を十匹程飼っているものね。

まあ、いざとなったらヘラクレスとミラクルを売ってしまえばそれなりの金額にはなるはずだからね。ただスーパードンだけは新居に連れて行きたいからね、うん。

あつ、ミラクルやスーパードンなんちゃらというのは僕の飼っているカブト虫の名前で、常に超人ランキング上位五位に入ってくる強者達なのです。

昨日もうちのミラクルが山ちゃんのMAX2号を叩き潰したのでした。

ただ、個人的にはヘレンちゃんにがんばって七位くらいには入ってほしいんですけどね。

彼等には内緒ですよ。うふふふ。

そっかあ。田中美代子さんかあ、うーん、もう5センチほど髪が長ければ理想像にピッタリなだけだなあ。僕が今一歩決断しきれないのはそこであつた。

5センチ。

たった5センチであつたが、それは永遠に続く長い道のように辿り着くのは困難だった。

その点、先程の方。吉田真理子さんはちょうどよい黒髪だったね。肩まで伸びた髪、優しい笑顔、スラリとした脚線美。そしてなによりボインちゃんなのだ。

拍手ーっ、わーっ。パチパチパチパチっ。

いやーまいった。

こめったわ。

米なだけにこめったわ、うん。

マツつんが居たらまた冷やかされちゃうな。

もう、すぐ誤解するんだもんね、あの馬鹿野郎は。

コテコテの馬鹿だからね。死ねばいいよ。

うんうん、うんうんうんうんうんっ。

でも、こうなってくると、かなり分からなくなっではきたよ。うん。

ランキングはいつ入れ替わるか分かったもんじゃないからね。

ふざけんじゃないってんだよ、馬鹿たれが。うん。

はつきり言っで、遅番の鈴木美紀さんだっでまだまだ頑張りしだいではトップ3に入ってくるからね。

これは忙しくなってきたぞ。

よし、帰ったら最新版に書き替えよう。はいっ！

「お待たせしました、クリームパフェでございます」

（一気に食べてスツと帰ってね）

真理子さんが笑顔と共に持ってきてくれた。

「ああ、うん、ありがとう。汁だくだよね？うふふ。しかし、あれだね？

クリームパへいうのは白くて甘くて、なんだね、言わば初恋の女性
のようだね。えへへ」

「はっ、はい？」

「いやいや、うん。クリームの白くて甘いのと、初恋の白くて甘い
感じをかけてみたんだけどね。うん、いいよ、うん。」

「ちよつと分らないですが？」

（て言うか、早く帰ってください）

「いやあ、なに、あれだよ君、ファーストチッスは何才なの？セカ
ンドチッスじゃないぞっ！

えーっ？えへへへへ。んがっんがっ。」

興奮して喉が鳴ってしまった。

「いえ、そういう事はちよつと。」

（警察は1・1・0だったよね）

「なにになにっ、えーっ。僕なんかもう両手では数えきれないくら
いファーストチッスをしてるよ。うんうん。いいよ、いいんだよ。」

「あのう、失礼いたします。」

（永遠に失礼します）

「あつ、ちよつと待つとくれやす。これ。」

僕はポケットから2百円を取出し渡した。
最低限のマナーである。

「いえ、困りますから。」

（桁をお間違えですね？）

「いいよいいよ。」

僕は彼女の手を掴むと半ば無理矢理手渡した。そのほうが受け取りやすいからね。

これも大人のマナーである。

その時、私の野獣のようなゴツゴツした手が彼女の柔らかくて白い肌に触れた。

M子の白くて艶やかな頬が赤らんだのが見て取れた。

彼女の煌めく黒髪、清潔感のある白いブラウス、すらりと伸びる足、その総てに私の男性的欲望が高揚したが、落ち着いて言った。

「ほんばにええねんで。」

M子は恥ずかしそうに去っていった。

いやあ、あの白い肌は秋田美人だね。

秋田は肌の白い美人がわんさかいるからね。

だとすると家は農家をしているかもしれないな。

秋田で農家の旦那か。悪くないね、うん。

しかし農家っていうのは楽なもんじゃないよ。うん。

あまり軽く見てもらっては困るんだ。

ふざけていいことと悪いことがあるんだよ。うん。

農家の過酷な一日というのは多分こんな感じであろう。

朝五時に起きて、土を均して種を植える。

そしてじっちゃんばっちゃんが、ぎっこんばったんと田畑を耕す。
12時位になるとお母ちゃんが呼びに来て、おにぎりとお煮を食べるんだ。

そしてしばし昼寝をしたり、オセロなんかをして夕方まで待つんだ。
夕方になるといい感じになった作物を刈ったり、牛や豚の世話をするんだ。

夜になったら、お父ちゃん、お母ちゃん、お兄っちゃん、お姉っちゃん、じっちゃん、ばっちゃん、ぎっこん、ばったん。大体10人位でご飯を食べるんだ。

大人数で囲む食卓はワイワイ楽しくて美味しいけど、そんな時でも決して作物の見張りを怠ってはいけない。

下手をすると牛や豚が田畑を荒らしてしまうからね。まったくんでもない奴らだよ。

まさにメスブタなんだわ。

まあそんな時でも大概はポチみたいな、犬っコロみたいな奴が吠えてくれるんだけどね。

賢いんだわやっぱ。

犬のおまわりさんだわ。

で、食事が終わったら可愛い弟や妹がやってきて、「お兄っちゃん、宿題おせーて。どーかひとつ、どーかひとつ」なんて言ってくるんだよね。

「うん、いーど、いーど、e-domo」なんて言ってるね。

君、そこはね、2・1が2、2・2が4、ニンニクニンニクニンニクニンっ！なんて言ってるね。うん。

794うぐいすコケコッコー！！なんて言っちゃったりなんかしちゃいましてですね。

うふふ。

程々に小汚い鼻たれどもの相手をしてやって、その後は……
うふふ、大人の時間だね。
うふっ、ふふふふ。

真理子さん。

はい。

今晚あたりいいじゃないですか？

え？なんのこと？

とぼけるのはよしとくれよっ、おまいさん。

真理子の白い頬が赤らむんだ。

いいだろ？なあ？

え？でも……

もう辛抱たまらんにやわ。

でも隣にお父つつあん、お母つつあんが。

うるせーっ！あいつらの耳に粘土でも詰めとけっ。
バシッバシッ！

なんて言ってね。

うんうん。
いいね、いいね。

うん、やっぱりクリームパヘていいね。甘いよ。うん。初恋の味だね。

僕はクリームパヘを食べているときは本当に幸せな気持ちになれるんだ。

どんなに嫌なことがあっても忘れられるんだ。
あんなこともあった、こんなこともあった、泣きたくなくなるようなこともあった。

自転車を盗まれたとき。

おまんじゅうを地面に落としてしまったとき。

通りすがりのおばちゃんに叩かれたとき。

どんなときだってがんばってきたんだ。

お母さんに一日2千円もらって、その中からどうにかここでパヘとかプリンとかを食べるのが、僕の唯一の楽しみであり慰めなんだ。

だっ大体僕はいつだって……

気持ちが高ぶりすぎて、知らぬ間に思っていることを口に出してしまっていた。

その為、周りの心ない人々にジロジロ見られていた。

とても熱く、それでいてとても冷たい視線を浴びていた。

「どうかされましたか？」
(まだいたの?)

ウェイトレスの真理子さんが飛んできた。

「いや、なんでもないんです。ちょっと雑誌の上にクリームをこぼしてしまっただってというのはあります。それは本当です、信じてください。」

「な、何度もこぼされるとこちらも困るんですよ。」
(出てけっ！)

「そ、それは自分でも納得いってないっていうのはあります。真理子さんも嫌でしょうけど私もうんざりなんです。」

自分をもつと彼女に理解してほしい、そんな気持ちだった。

「え？真理子さんでどうして私の下の名前が分かったんですか？名札には名字しか書かれてないのに。」

(気持ちが悪いです)

「いやあ、なに。レジの横のタイムカードを見たのさ。うん、なんて事はない裏技を使ったのさ。なんだ。」

真理子さんていい名前を付けてもらったね。毬のように丸い娘になってほしかったんだろうね。うん、丸いポイントポイントに」

「おつ、お客さま、そういう事をされると困るんです」
(裁判沙汰です)

真理子は少々感情を露にした。

「お客さまってあーた、キーちゃんていいよ。キーちゃんね。」

お宅のじっちゃん、ばっちゃんもそう呼んでくれるよ。きっと。」

「はいっ？私にはお爺ちゃんもお婆ちゃんもおりませんか？」

「え？じゃあ秋田の田んぼは？」

「はあ？なんの事がさっぱりわからないんですけど？」

冷淡な真理子さんの表情が見て取れた。

「えっ、えっ？ぽっぽっポチは？」

「意味が分からないんですけどっ！」

「じっ、じゃっ、じゃあ、けっ、けっ、結婚は？」

「……いい加減にしてくださいっ！！なんで私が初対面のあなたと結婚するんですかっ！私にはハンサムな彼がいるんですっ！」

「あっ、そっ、そっ、そうなんですか？でっ、でっ、では田中さん、田中美代子さんはいつ、きっ、きっ、来ますか？」

「田中さんなら辞めましたけど。」

「ええっ？なっ、なんでなのですか？」

僕はショックで水をこぼしてしまった。
先程もらったおしぼりをカバンから出し、一生懸命拭いていると彼女が冷たく言い放った。

「毎日来るしつこいお客さんがいるって。半分ノイローゼだったらいいですよ。」

まあ誰かは大体想像つきますけどねっ！
（確定だよな）

「えっ！そっ、それでは遅番の鈴木さんは？」

「辞めました」

「ええっ！国木田さんは？」

「故郷へ帰りました」

（青春18切符で帰りました）

「まっ、まっ、マスターは？」

「神経衰弱で入院してます。」

（昨日は笑いながら泥を口一杯に頬張ってました）

「えっ、ええっ！？二丁目の東国原さんは？」

「誰ですかそれ？あと私も今日で辞めますし。」

「あっ、そう、そうですか。みんないなくなってしまうわたのですね。そうですか。」

あなたも……では私もおいとま致します。」

僕は突然の事にとまどいと驚きを隠せなかった。

いつも七杯は飲む、おかわり自由のミルクティーも頼まず家に帰ることにした。

人間というのは素敵な出会いがあれば、必ずいつか辛い別れがやってきます。

春が来て桜が散ったかと思えばもう夏が来て、秋が来て紅葉が散ったかと思えばいつの間にならなくなる。

こうして四季が次から次へやってくるように、出会いや別れもやってくる。

人との出会いや別れは四季の移り変りのように淡々としたものではないもので、そこには必ず喜びや、辛く悲しい人間の感情というものがあるのです。

いつも道ですれ違う人々。

電車で一緒になる人々。

テレビの中の人々。

今はお互い知らぬ者同士だけれども、もしかしたらこれから友達になったり家族になったりするかもしれないのです。

私たちはそうした“もしかの友達や家族”との出会いや別れを毎日何十何百何千と繰り返しているのではないのでしょうか。

転んだ人がいたら手を差し伸べましょう。

お年寄りや具合の悪い人には席を譲りましょう。

落とし物があつたら届けましょう。

だってどの人もこの人も、もしかしたらこれから友達になったり、家族になったりするかもしれないのですから。

僕は今日ひとつの素敵な出会いと、沢山の悲しい別れがありました。

辛いし、やるせないし、泣きたくなる。

でもそんな時はカフェドナルドでクリームパフェを食べるのです。

つらくたっていいのさ、悲しくたっていいのさ、僕は笑うよ。
いつだって笑ってたら不幸が気持ち悪がって逃げてくんだ。

夕焼け小焼けで帰ろうか、君の家まで100歩200歩。

明日は晴れるかな？昨日は晴れたっけ？

気持ちが晴れてりゃ関係ないのさ。

みなで肩組み歌おうよ、月陽が眩しく笑ってら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4129c/>

少年の詩

2011年1月5日02時21分発行